

## カフェ支援から地域支援へ

### —南三陸町における心理支援活動を宮城県士会として「引き継ぐ」なかで—

センター運営委員 菊池陽子（宮城県臨床心理士会副会長）

南三陸町は宮城県内でも津波被害が甚大な地域でしたが、心理支援センター派遣の心理士の方々が早くから支援活動に入って下さいました。この地域は、すべての公共交通機関が壊滅的な被害を受けたうえ、もともと臨床心理士や精神科に心の相談をすることに馴染みの薄い土地でした。後者については、私ども県士会も反省すべき点ではありますが、このような事情から、当初、派遣心理士の方々は現地に到着するまでも、また、着いてからも様々なご苦労がおりだったと思います。しかし、その後の活動、特に2か所の仮設住宅内でのカフェ活動支援を通して、現地の社協、病院、行政機関、そして、住民の方たちと信頼関係を育まれ、地元の方は派遣心理士を「りんしょうさん」と親しみを込めて呼んでいらっしゃいました。今では、県士会の「こころの健康電話相談」のチラシを小さなカフェ内に4枚も5枚も貼っていただけるようになったことを、全国の「りんしょうさん」にご報告し、心から感謝の気持ちをお伝えいたします。

このカフェ支援に県士会は2011年12月から同行させていただきましたが、翌年7月まではセンターに引き継ぎを待っていただき、さらには、12月までの月1回派遣の延長も認めていただきました。9名のメンバーでのスタートであり、マンパワー不足が主な理由でしたが、それ以上に、これまでの良好な関係や丁寧な心理支援そのものを引き継ぎたいというチームの共通の思いがあったからです。すなわち、現地の関係機関や支援して下さる企業との細やかな連携、そして何より、深く傷ついていらっしゃる住民の方々に静かに寄り添うことや南三陸町を心から大切に思うことなどなど、この「見習い期間」で、ノウハウでないものを引き継がせていただけました。昨年7月から県士会主体の活動になりましたが、この間、会員の関心や理解も増し、現在は登録メンバーも19名になり、行事開催時には、単発の「助っ人」会員も参加してくれるようになりました。

現在、「カフェ支援」のほかに、「母子支援」「学童支援」のチームがあります。現地の状況も変化しつつあり、従来の2か所のカフェの1つが、この1月に閉鎖されました。その地区周辺には、小規模な仮設住宅が多く、県士会では集会所などをお借りして、月1回の“巡回お茶っこ会”を提案しました。地区によっては、すでに住民による自主的な会ができています所もありますが、社協の方からは、「心理の人が入ることに意味があるから」という言葉をいただき、入らせていただいています。また、母子支援ではベビーマッサージや絵本の読み聞かせなどを毎回計画していますが、対象が乳幼児であるだけに天候に大きく左右されることがわかり、大雨でも雷でも多数の利用者のあるカフェとの違いを痛感しています。また、学童支援は図書室の利用など新たな可能性を模索中です。さらに、社協の方からは、「みなし仮設支援」と「支援者支援」のお話をいただいています。みなし仮設のサロンに2回ほど入らせていただきましたが、町外で暮らされる方やご自宅の方の困難も目の当たりにしました。また、支援者、特に生活支援員さんの疲弊が問題になっており、県士会でも対応の必要を痛感しています。ただ、この両者ともに、平日派遣であり、定期的、継続的实施には相応の準備が望まれます。このように、仮設内から仮設外へと支援が広がり、そこには町の復興計画や住民お一人おひとりの思いが深く絡まることとなります。実際、個人的なお話を伺うことも多くなっていると感じています。今後も、中長期の支援を見据えて支援活動を継続させていただきたいと思います。これまでの皆様のご支援に感謝しますとともに、今後どうぞご指導を賜りたくお願い申し上げます。